

フランツ・リストと聖エリザベト －第1部、フランツ・リスト、その1－

キラメキテラス ヘルスケアホスピタル 栗 博志・高田 昌実・萩原 隆二
鹿児島大学 名誉教授 田島 紘己
加治木温泉病院 納 光弘
県立大島病院 夏越 祥次
栗 隆志

[はじめに]

フランツ・リスト (1811-1886) は、ハンガリー出身のロマン派の大作作曲家、指揮者、ピアニスト、教育者として多くの作曲家の音楽作品を世に広め、ピアノ演奏法を飛躍的に高めた事で知られる。

また生涯を通じ、慈善事業に尽くし、音楽家の地位向上に努めた事は、特筆すべきであり、社会に及ぼした影響は、音楽史上、他に比肩する者はいない。

ここでは、19世紀前、中期の西欧に於る音楽界を、リストを中心に述べ、パリ他を中心とした、音楽家など、いわゆる「文化人」達の複雑な人間模様や、簡単なエピソードなどを紹介し、良しにつけ悪しきにつけ、リストが如何にして、音楽家の地位向上をなしとげ

たかに言及したい (当時、一部の音楽家が真に偉大である事は、誰しも認識していたが、社会的地位は低かった)。

リストは、オラトリオ「聖エリザベトの伝説」を作曲した。このエリザベト (1207-1231) は、西欧の社会福祉の源流と考えられる人物である。中世キリスト教社会に於て、エリザベトの数奇な生涯を辿り、困苦の内に、若くして死んだ女性の列聖の奇跡を解明すると共に、光明皇后 (701-760) にも言及する。

第1部をリスト、第2部をエリザベト、第3部を光明皇后に当てる。

[第一章：19世紀の西欧の音楽家達と女性作家達]

[1] 19世紀に活躍した音楽家達の生年

本稿は、クラシック音楽に馴染みのない方も考慮して、比較的知名度の高い音楽家に関して述べるが、その生年を頭に入れておく事は、参考になると思われる。

18～19世紀の音楽家は通常、作曲家であると同時に演奏家でもある。

(1) 18世紀生まれの音楽家

1750 サリエリ、56 モーツァルト、70 ベートーヴェン、78 フンメル、82 パガニーニ、85 カルクブレンナー、86 ヴェーバー、91 マイアベーア、92 チェルニー、ロッシーニ

(2) 19世紀初頭には、今日、私達に特に親しまれている音楽家が輩出した

1801 ベッリーニ、03 ベルリオーズ、09 メ



図1 聖エリザベトの伝説よりパラの奇跡
(CD：リスト作曲，HUNGAROTON，1985)

ンデルスゾーン, 10 ショパン, シューマン,
11 リスト, 12 タールベルグ, 13 ヴァーグナー,
アルカン

(3) その後に活躍した音楽家

19 クララ・シューマン, 24 スナタメ, ブ
ルックナー, 29 アントン・ルービンシュタ
イン, 33 ブラムス, ボロディン, 35 ニコ
ライ・ルービンシュタイン, 39 ムソルグス
キー, 40 チャイコフスキー, 41 ドボルザーク

[2] リストに影響を与えた, 関与した4人の
女性作家達

(1) ジョルジュ・サンド (1804-1876)

ディドバン男爵夫人, ペンネーム, ジョル
ジュ・サンドは, 女性権利拡張, 男女同権運
動家であり, 男装で自己の主張を貫き, パリ
社交界で異彩を放った。

ノアンにある祖母の館で育ち, 「愛の妖精」
「魔の沼」などの田園小説を書いた。

ミュッセ, ドラクロア, リスト, バクーニ
ン, ショパン, ユーゴー, フローベールなど
と交流があった。

1838年には, ショパンとマジョルカ島に旅



図2 ジョルジュ・サンド
(Oil painting, charpentier, 1837)
文献1より引用

行。悪天候に悩まされながらも, ここで, ショ
パンは代表作の数曲を作曲した。

(2) マリー・ダグー伯爵夫人 (1805-1873)

彼女は, パリでサロンを開いたが, 音楽家,
作家など多くの文化人が, 彼女の元に集まっ
た。リストもその一人であった。

彼女は, 1835-1839年をリストと共に過ご
し, 2女1男をもうけた。

長女と長男は, 比較的若くして死亡。

リストに残された子供は, 二女のコジマの
みであった。

コジマは当初, リストの高弟のハンス・フォ
ン・ビューローと結婚したが, 1870年にヴァー
グナーと再婚。1883年にヴァーグナーが死ぬ
と, バイロイトの女主人として1906年まで君
臨した。

ニーチェは「この人を見よ」でコジマを
「最高の高貴な天性の才能の持ち主」と讃え
ている。

若きバーゼル大学教授のニーチェは, 9歳



図3 マリー・ダグー伯爵夫人
(Théodore Chassériau 1841)
文献1より引用

より作曲を始め、五声のミゼレーレや大曲「クリスマス・オラトリオ」など多くの作品を残した。リストに感銘を受けて、17歳の時には、交響詩「エルマリッヒ」を作曲、ピアノ演奏もかなり上手だったようである。

ニーチェとヴァーグナーは、ショーペンハウアーを接点として親交を開始したが、ヴァーグナーは、ニーチェを単なる音楽上の弟子としか、見做していなかった。

ニーチェの著作「悲劇の誕生」以後は、彼に対する見方を変えたが、最終的には両者は決別・対立した。



図4 リストの二女コジマとヴァーグナー
(ヴィーン, 1872)
文献2より引用

リストとヴァーグナー、コジマ、ビューローの関係も可成り複雑である。

マリーは、1844年、リストと不仲になってから、同年、問題作の小説「ネリダ」を書き、1847年に別れた。

1848年の仏2月革命は、ヴィーン、ベルリン、49年には、ボヘミア(チェコ)、ハンガリー、プロイセンのバイエルン、ザクセンなど瞬く間に、全ヨーロッパに広がった。

1843年以後、ザクセンの宮廷楽長の座にあったヴァーグナーは、ザクセンの首都ドレスデンで、革命派として活発に活動したが、革命の失敗で追われる身となり、チューリッヒで9年間の亡命生活を送る事となった。

1851年にマリーは「1848年革命史(全2巻)」を著した他、「ネーデルランド共和国草創史」「ジャンヌ・ダルク」等を著した。

(3) クリスチーナ・ディ・ベルジョイオーゾ侯爵夫人

クリスチーナは、イタリア統一運動の推進者で、ヨーロッパと南米の「2つの世界の英



図6 クリスチーナ・ディ・ベルジョイオーゾ侯爵夫人
(Théodore Chassériau, 1847)
文献4より引用



図5 1848年のミラの市街地での戦闘
(Mary Evans)
文献3より引用



図7 ベルジョイオーゾのミラノの宮殿
文献4より引用

雄」と呼ばれたガリバルディやマッツィーニなどの友人で、「革命の王女」と呼ばれ、当時、国家反逆罪でパリに亡命しており、サロンを開いていた。

彼女は、バルザックやハイネと親しく、マイアベーア、デュマ、ベッリーニなどが集まった。

彼女自身、ベッリーニにピアノを、ジュディッタ・パスタに歌を習っていた。

クリスチーナは「東洋に於る極めて内面的生き方と放浪の人生」他、多くの論文、著作を残した。

1859年、イタリアに戻り、新聞「イタリア」を創刊。慈善事業、愛国運動に尽し、全ヨーロッパにその名を知られた、傑出した女性であった。事業などの為、彼女はロンバルディアの財産を失った。

(4) カロリーネ・フォン・ザイン＝ヴィットゲンシュタイン侯爵夫人 (1819-1887)

カロリーネは、ポーランドの大地主の家に生まれた。父親の死後、ウクライナの広大な土地を引き継いだ(約3万人の農奴を抱えていたと言われる。ちなみにヴァイマルの人口は約1万2千人)。

1846-47年に、リストはユーゴスラビア、ルーマニア、南ロシア、トルコの大演奏旅行を行うが、47年のキエフの慈善演奏会で、カ



図8 カロリーネ・ザイン＝ヴィットゲンシュタイン侯爵夫人
(オデッサ, 1847)
文献1より引用

ロリーネとリストは出会う。

1848年、リストはヴァイマル大公国の首都ヴァイマルの宮廷楽長に就任した。

この地は、ゲーテ (1749-1832) が1775年から、1799年からシラーも往んだ歴史的な文化都市であった。

リストは、ピアニストとしての絶頂期に、ピアノ演奏活動を中止し、この地で13年間を過ごす事となる。

かつては、バッハも活躍し、ゲーテなどによる文化の中心地ヴァイマルも、ゲーテの死後には「芸術時代の終焉」を迎えていた。

ヴァイマル大公妃マリア・パヴロヴナと息子のカール・アレクサンダー皇太子は、ヴァイマルの文化都市復興を、リストに托したにちがいない。

実際にリストは、多くの作品の作曲、指揮(例えば「ローエングリン」の世界初演、ヴァーグナーは、この作品をリストに献呈)、ゲーテやシラーの生誕百周年記念祭、ゲーテとシラー像の除幕式、執筆活動などを行い、この地を一大文化都市に押しあげたのである。

リストの活動を支えたのは、カロリーネで



図9 ヴァイマル宮廷劇場前のゲーテとシラーの記念像, 1857
(Alfred Krause, ca. 1860)
文献1より引用

あった。1848年、カロリーネはロシアを出国し、以後、リストと共に人生を歩む事となる。

敬虔なカトリック教信徒のカロリーネは、精神面でリストを支えると共に、作曲面でも多くのインスピレーションを与えた。

リスト以外にも例えば、ベルリオーズも励まされた一人である。

オペラの創作に悩んでいたベルリオーズがヴァイマルを訪れた時（オペラの作曲には長期間を要し、上演には舞台装置など、多額の費用を要する）、この「類まれな知性と感性の持ち主のカロリーネ」に、もし、ディドー（カルタゴの女王）とカサンドラ（トロイアの女王）の作品の作曲に尻込みするなら、今後は会ってあげない、などと激励（？）され、パリに戻ると直ちに、グランド・オペラ「トロイアの人々」の台本と作曲に取りかかった。

この作品は、古代ローマの詩人ウェルギウ

スの、トロイア滅亡後のアエネアースの遍歴を描いた、ラテン文学の最高傑作「アエネーイス」を素材にしており、演奏時間は4時間に及ぶ全5幕のオペラである。

1858年に完成したが、独語版の全曲演奏が行われたのは、実に死の20年後の1890年、仏語版の全曲演奏は、1969であった。

音楽の世界とは、そういうものである。

ヴァーグナーが、自作の為の劇場をバイロイトに造ろうと、情熱をかけ、あらゆる手段を講じたのも肯ける。

カロリーネは、リストの死の8ヶ月後の、1887年3月に死亡したが、死の2週間前に「1870年の教会の弱点の内的要因」を書きあげた。

この書籍は、全24巻に及ぶ大著（1巻は1,000頁以上）である。

ナポレオン（1769-1821）は、1804年国会議決と国民投票で、教皇ピウス7世出席のもと、慣例を破り自ら王冠をかぶり（全て自らの手で勝ち取る）、フランス皇帝となった（仏第1帝政）。

然し1812年のロシア遠征の大敗（生還者は、わずか1%、5,000人）により弱体化、1814年には、オーストリア、プロイセン、イギリス、スエーデン軍により、パリは陥落し、ナポレオンはエルバ島に流され、ブルボン王朝（ルイ18世、シャルル10世）が復活。

1815年、ナポレオンはエルバ島を脱出し復位を果たした。然し、イギリス、プロイセン連合軍にワーテルローの戦いで敗れ（百日天下）、セントヘレナ島に流され、1821年に没した。ナポレオン戦争の死者は、200万人と言われる。

1830年、旧態然とした王政に、パリ市民が三色旗を翻し反乱を起こし、シャルル10世は退位。仏7月革命である。これにより立権王政となる。

1840年には、ナポレオンの遺骸がフランス



図10 ドラクロワの「民衆を導く自由の女神」
(ルーブル美術館, 1830)
Wikipediaより引用

に返還され、ナポレオン人気が復活。

1848年、シチリアで起こった暴動は、直ちにフランスに波及し、仏2月革命が起こり、王政が廃止され、第2共和政となった。

この期に乗じ、仏を追われ亡命していたナポレオンの弟の三男は帰国。選挙で共和政の大統領、更にはクーデターで独裁権力を握り、1852年に皇帝に即位し「ナポレオン3世」を名のる(第2帝政)。

彼は、帝国主義政策で領土を3倍に広げた。

慶応3(1867)年の第2回パリ万博では、薩摩藩、佐賀藩と徳川幕府が共に出展した。

この時、徳川昭武は、ナポレオン3世より金メダルを授与された。

然し、1870年の普仏戦争で、ナポレオン3世はプロイセンの捕虜となり、パリでクーデターが起こり、第2帝政は崩壊し、第3共和政へ移行した。

図10は、ドラクロワによる1830年のフランス7月革命の「民衆を導く自由(自由の女神)、ルーブル美術館」である。

女性は自由を象徴すると言われる。

左のシルクハットの銃を持つ男は、ドラクロワ自身を描いたとも言われる。

19世紀の西欧は、ロマン派が開いたが、一方では暴動、クーデター、革命、国家の統一運動、戦争の時代でもあった。

当時、パリなどで文化活動に活躍していた前記の女性達は皆、高い知性と教養、強い意志と独立心を持っていた。女性は男性同様、親からの財産、地位をも受け継ぎ、恵まれた経済力を背景に、誰にもじゃまされずに自立できるコスモポリタンであった。

当時の音楽家は、もちろん限られた分野に於ては、皆が比類無き才能の持ち主ではあったが、それを開花、進化させるには、彼女達の与えるインスピレーションやイマジネーション、更には彼女達の元に集まる、多種、多様、多彩な芸術家達との交流が、互いの切磋琢磨に繋がったに違いない。

当時の貴族階級の財産相続や爵位等に関しては、上流階級を批判した「虚栄の市」の作者、サッカレー(1811-1863)の小説「バリー・リンダンの運(1844)」を、キューブリック監督が映画化した「バリー・リンダ(1975)」によって窺い知る事ができる。

文 献

1. Burger, E.: Franz Liszt. Princeton University Press, 1989.
2. アリス・ソコロフ: コージマ・ワーグナー. 音楽之友社. 昭和51年.
3. Southwell-Sander, P.: Verdi, Omnibus Press, 1978.
4. ピエロ・ラッターリーノ: 大作曲家の世界, リスト. 音楽の友社, 1990.